

近世後期県居派鈴屋派国学の研究

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来、近世から近代への移行期であることから、十分な検討がなされないまま放置されてきた、近世後期における国学のありようを、紀州藩士で本居大平の門人であった長沢伴雄、ならびに、筑前小倉藩士で県居江戸派の村田春海と関係の深かった西田直養の事績を通して、具体的に解明しようとしたものである。

第一部の前半、長沢伴雄について論じた三章では、まず、同じく紀州藩士で長沢伴雄の先輩に当たる国学者の加納諸平との間に起きた、長沢伴雄による毒殺未遂事件について、従来の加納諸平側の資料のみよる事件の把握に著しい偏りがあることを、学界未紹介の台湾大学蔵長沢伴雄旧蔵書群を用いて明らかにしている。また、国学者の仕事の一つとして、第十代藩主徳川治宝の庇護下、『春日権現験記』の模写の陣頭指揮に当たり、その完成にまで導いた経緯を、新資料を駆使して具体的に解明している。さらに、歌人としては『類題和歌鴨川集』を五集まで編纂し、当時の類題和歌集流行の一翼を担う恰好となったのだが、実際の編纂に当たって、地方にいる和歌の宗匠や作者たちといかなる連携関係にあったかを、多数の書簡等を通じて明らかにしている。

これら長沢伴雄に関する研究を裏打ちすべく、特に用意されたのが、第二部である。そこではまず、新出資料である長沢家現蔵の『長沢家系図』を翻字するとともに、長沢伴雄の年譜について、詳密な考証がなされている。ここには、前記台湾大学所蔵の厩大な資料を調査した成果が反映されており、圧巻といえる。年譜考証を通じて、近世後期を生きた一人の国学者の多彩な活動を窺い知ることができ、特に有職故実への打ち込みに際立った特徴のあることが、論文調査委員の一人から指摘があった。今後、旧来の国文学研究という枠に囚われず、その事績全体を捉える視点の獲得により、研究の飛躍的な進展が期待される、との意見で一致した。

第一部の後半、西田直養について論じた三章では、まず、小倉藩士たちに県居江戸派と深い繋がりがあったことを突き止め、西田直養自身も和歌の宗匠として県居江戸派の地方への拡大に貢献し、その影響力が防長地方にまで及んでいた事実について、幕末期の詠草短冊の渉獵によって明らかにしている。また、西田直養の師である小倉藩士秋山光彪の著した『桂園一枝評』によって勃発した、香川景樹の桂園派と小倉藩士たちとの論争が、より広くは、近世後期における桂園派對県居江戸派の対立という構図から説明できるものであることを立証している。さらに、西田直養がパラオ諸島から帰還した一人の漂流民と会い、彼から聴取した内容を記した『ペラホ物語』を取り上げ、そこに、文献主義一辺倒ではない、後の柳田國男へと繋がるような民俗学的な研究の萌芽を見ている。

近世を近世の視点から解明しようとした本論文は、多くの新資料の丁寧な解読の上に立って妥当な結論を導く、極めて実証的なものであると評し得る。

以上のような観点から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいと認めるものである。